

様式③

提出日 2021 年 1 月 22 日

2020 年度 琉球弧研究支援 報告書

研究テーマ「近世琉球における首里の士族社会について
—乾隆年間の河川改修事業を中心に—」

氏名：兼城夏芽

所属学部学科：経法商学部経法商学科

I. 初めに

近世琉球における大規模な治水事業は「羽地大川改修」に始まる。雍正 13 年（1735）8 月、台風が襲来したことにより、甚大な被害を受けた羽地間切大浦川の改修工事「羽地大川改修」が実施された。「羽地大川改修」は、三司官の蔡温が中国で習得した治水技術を用いて大浦川を安定した川筋につくりかえたほか、川沿いの水田に水を行き渡らせる水田開発をも兼ねていた。主導者の蔡温は、この河川改修工事におよそ 10 万 7380 人¹もの百姓らを動員し、わずか 3 ヶ月という短期間で工事を完竣させた。その後、範囲はさらに拡がり、翌年の乾隆元年（1736）以降には琉球全域にまで及び、やがて大規模な乾隆検地へと発展していった。

このように近世琉球では、蔡温が主導した「羽地大川改修」や「乾隆検地」といった大規模な土木工事が実施された。これらに関する先行研究には、測量技術や治水技術に主眼が置かれた研究が比較的多くみられる。特に、乾隆年間の河川改修工事については、役人たちの家譜を基に工事のプロセスや役人達の動向を追った研究が存在するのだが、今回、筆者が収集した『向姓家譜正統名護家』²にも同様の記事が収録されているにもかかわらず、先行研究では言及されてこなかった。もしかすると、本史料の記事の存在自体知られていないのかも知れない。そこで本研究では、『向姓家譜正統名護家』に見える河川改修工事関連の記事を分析し、工事に参画した士族らを調べることで、従来の先行研究からは見えてこなかった河川事業の新たな視点を模索してみたいと考えている。

II. 研究の目的、動機

筆者が昨年度の琉球弧研究支援制度を利用して収集した『向姓家譜正統名護家』の四世朝宜（向伯忠・名護按司朝宜）の記録に、琉球全域に及ぶ河川改修事業に関する記録が含まれていた。その記録の中には多くの士族たちが名を連ねており、同事業に携わった士族たちを結び付けることができれば、士族社会の一端が垣間見えるのではないかと考えた。

本研究では、『向姓家譜正統名護家』や関係資料を基に役人達の家譜を収集し、近世琉球の国家プロジェクトともいえる大規模な河川改修にどのような士族が関わっていたのかを明らかにしたい。そして、士族間の関係性を整理することで近世琉球における士族社会の諸相を探ってみたい。

III. 研究方法、地域、期間

(1) 研究方法

家譜資料と関連資料の収集、文献資料の読み込み、データベースの作成・分析

¹ 名護市教育委員会文化課市史編さん係編『名護市史 資料編 5 文献資料集 1 羽地大川修補日記』名護市役所、2003 年、26 頁。

² 第二尚氏 10 代目国王である尚質王の三男、尚弘仁（名護王子朝元）を始祖とする名護御殿の家譜の筆写本。沖縄県立図書館所蔵。

(2) 期間

7月～10月	参考文献のリスト作成及び先行研究の整理
8月～10月	『向姓家譜正統名護家』の全文翻訳（日本語訳）・内容分析、 その他関連家譜の収集
11月～1月	データベースの作成
12月18日	家譜2冊の閲覧と収集（場所：那覇市歴史博物館）
1月	データベースの分析

IV. 結果

『向姓家譜正統名護家』を始めとする家譜資料ならびに関連資料から、乾隆年間初期の河川改修事業を担当した24名の役人を確認することが出来た。その内訳は、川原筋調奉行職³13名、学習水理職⁴4名、川原筋調方筆者7名である。さらに、氏ごとに分類したところ、向氏11名、毛氏5名、麻氏・馬氏各2名、孟氏・劉氏・呉氏・阿氏各1名、という結果となった。しかし、本研究の目的を達成するためには、本人または家系の階層が明白であることが最低限の条件であると考えた。そのため、条件が揃っている士族のみを研究対象とした。結果は以下の通りである。

(1) 役職ごとの士族階層

役職ごとの階層傾向として、川原筋調奉行職は8名中御殿家5名、総地頭家2名、中・下級クラス1名という結果であった。学習水理職は4名中御殿家2名、脇地頭家2名であった。川原筋調方筆者は3名中総地頭家2名、脇地頭家1名であった。

(2) 役職ごとの年齢層

任命時の年齢が明らかな人物に限定して見てみると、川原筋奉行職は33～53歳までの士族が任命されていた。学習水理職は33～39歳、川原筋調方筆者は24～32歳という結果となった。

(3) 家系の元祖からみる特徴について

表1の「家系の元祖と人物の関係」を整理したところ、尚質王の息子たちを元祖とする家系から輩出された人物が多いことが判明した。その他にも、毛国鼎を元祖とする家系の分家や麻普尉を元祖とする直系の家とその分家、尚真王の三男を元祖とする直系の家とその分家など、祖先を共通とする士族の事例が多く見受けられた。

³ 単に川の測量を行うだけではなく川の改修工事、高低差の改修、川を蛇行させる等の工事を行ったものと考えられる（田里修「蔡温と乾隆（元文）検地」『琉球の築土構木—土木・技術からみた琉球王国—』沖縄しまたて協会、2016年、167頁）。

⁴ 蔡温が風水思想を取り入れて独自に考案した治水技術を専門的に学ぶ役職。

表1 乾隆年間初期の河川改修事業を担当した士族の一覧⁵

	人物名	年齢	役職	分類	階層	家系の始祖と人物の関係
1	向文思（本部按司朝隆）	—	川原筋調奉行	首里系	御殿	第二尚氏 10 代目国王尚質の六男、尚弘信（尚氏本部王子朝平）を始祖とする本部御殿の三世。
2	向英（美里按司朝孝）	—	川原筋調奉行	首里系	御殿	第二尚氏 11 代目国王尚貞の四男、尚紀（尚氏美里王子朝禎）を始祖とする大宜見御殿の二世。
3	向文明（玉川按司朝雄）	—	川原筋調奉行	首里系	御殿	第二尚氏 10 代目国王尚質の七男、尚弘善（尚氏宜野湾王子朝義）を始祖とする与那城御殿の三世。
4	向慎憲（東風平按司朝寛）	33	川原筋調奉行	首里系	御殿	第二尚氏 10 代目国王尚質の五男、尚弘徳（尚氏東風平王子朝春）を始祖とする勝連御殿の三世。
5	向宣謨（今帰仁王子朝忠）	37	川原筋調奉行	首里系	御殿	第二尚氏 3 代目国王尚真の三男、尚韶威（尚氏今帰仁王子朝典）を始祖とする具志川御殿の十世。

⁵ 凡例：人物名は唐名と（ ）内に和名を記した。不明な人物については、現時点で分かる範囲で記した。分類は氏集に基づいて行い、階層は田名現時点で不明な箇所は「—」で記した。

6	向延瑚（玉城親雲上朝嘉）	36	川原筋調奉行	首里系	総地頭	第二尚氏 3 代目国王尚真の三男、尚韶威（尚氏今帰仁王子朝典）を始祖とする具志川御殿の分家、辺土名殿内。始祖は向洪基（向氏玉城親方朝智）。向延瑚は十一世。
7	毛其隆（伊野波親雲上盛眞）	38	川原筋調奉行	首里系	総地頭	毛国鼎（中城按司護佐丸盛春）を始祖とする毛氏の分家。始祖は毛泰永（毛氏伊野波親方盛紀）。毛其隆は十一世。
8	孟受祉（佐邊里之子親雲上康昆）	53	川原筋調奉行	首里系	中・下級	孟氏大里親方宗森を始祖とする西平家の支流。始祖は孟受祉の父、孟命新（孟氏佐邊里之子親雲上宗令）。孟受祉は九世。
9	毛弘休（保栄茂里之子親雲上盛征）	39	学習水理	首里系	脇地頭	毛国鼎を始祖とする毛氏の分家。始祖は毛弘休。
		44	川原筋調奉行			
		46				
10	毛昌裔（野村里之子親雲上安孝）	37	学習水理	首里系	脇地頭	毛龍口（口十全）（毛氏大新城親方安基）を始祖とする毛氏の分家、大工廻家。始祖は毛昌禎（毛氏野嵩親方安平）。毛昌裔は七世。
		41	川原筋調奉行			
11	向伯忠（名護按司朝宣）	33	学習水理	首里系	御殿	第二尚氏 10 代目国王尚質の三男、尚弘仁（尚氏名護王子朝元）を始祖とする名護御殿の四世。
12	向全徳（宇地原按司朝計）	—	学習水理	首里系	御殿	第二尚氏 10 代目国王尚質の七男、尚弘善を始祖とする与那城御殿の四世。

13	向邦器（湧川里之子親雲上朝教）	24	川原筋調方筆者	首里系	総地頭	第二尚氏 2 代目国王尚宣威の長男、尚魏儲（尚氏越来王子朝理）を始祖とする湧川殿内の十二世。
14	麻延章（石嶺里之子親雲上真安）	32	川原筋調方筆者	首里系	脇地頭	麻普尉（麻氏大城按司眞武）を始祖とする麻氏田名家の分家。始祖は麻以德（麻氏儀間筑登之親雲上真韶）。麻延章は十一世。
15	麻元楷（渡嘉敷親雲上眞勝）	29	川原筋調方筆者	首里系	総地頭	麻普尉を始祖とする麻氏田名家の十二世。

表 2 役職ごとの士族階層

	御殿	総地頭	脇地頭	中・下級	合計
川原筋調奉行	5	2	0	1	8
学習水理	2	0	2	0	4
川原筋調方筆者	0	2	1	0	3
合計	7	4	3	1	15

V. 考察、分析

表 2 から分かるのは、中・下級クラスの士族が川原筋調奉行職に任命されていることである。学習水理職や川原筋調方筆者では確認することができなかつたため、その存在は異質に見えるかも知れない。しかし、一般的に脇地頭クラスの士族でも奉行職に就くことが可能であり、中・下級クラスとは役職の上であまり大差はない⁶とされていることから、決して珍しい事例ではない。それでも、中・下級層からの任命が少ないことと唯一の事例である孟受祉の年齢が他の奉行役人より高いことから、中・下級層から奉行職への就任は容易ではなかつたことが窺える。

役職ごとの年齢層については、3つの役職の中で最高職である川原筋調奉行が33歳から53歳までと幅広い。学習水理職は33歳から39歳となっており、奉行の年齢層と多少

⁶ 那覇市企画部市史編集室編『那覇市史 資料篇 第1巻7 家譜史料（三）首里系』那覇市市役所、1982年、8頁。

重なる。しかし、毛弘休と毛昌裔は事業の途中で別の役職に任命された後、川原筋調奉行に再任されていることから、この職の役割は30代の上級士族が担っていた可能性が考えられる。一方で川原筋調方筆者については、他の役職より低い地位であることから、役人の年齢も比較的低いのだろう。

最後に、河川改修事業に携わった士族個人間の関係性を考察していきたい。家系の始祖からみる特徴について、同事業に任命された士族には先祖を共通とする者が多いことを挙げた。特に、尚質王の息子らを始祖とする御殿家の按司たちが多数確認できる。彼らは尚質王のひ孫または玄孫であることから、互いの関係も非常に親しい間柄だったと考えられる。さらに、向文明と向全徳は親子であることから、親子間で蔡温の治水技術を共有していたのではないだろうか。なぜなら、向文明は蔡温から「よく水性玄奥の妙を知りて邦家の為に盡瘁せる」と賞賛され、1744年に『順流真秘』⁷を授けられる⁸ほど治水技術に精通していた人物であり、子の向全徳は学習水理として事業に携わっていたからである。

このように、乾隆年間初期に実施された琉球での大規模な河川改修事業には、御殿家から中・下級層に至るまで、幅広い階層の首里系士族が関わっていたことが分かった。特に、向氏の人物が多数輩出されていることから、向氏は王家の末裔として国家事業を牽引する役割を必然的に担わされていたと考える。また、向氏以外にも共通の先祖を持つ者同士が配属されていたことから、近世琉球における首里士族社会は狭い社会であったと考えられる。

VI. 今後の展望

今回の研究では、各士族が河川改修事業に配属された背景を明らかにすることができなかった。その背景を知るために、同時期に蔡温によって進められた植林事業や乾隆検地にも目を向けていきたい。

VII. 終わりに

以上、家譜資料や蔡温の治水事業に関する資料から、乾隆年間初期の河川改修を担当した士族らがどのような家柄の人物だったのか調べてみた。その結果、御殿家から中・下級層まで様々な階層の首里士族が事業を担っていたことが分かった。しかし、尚質王の息子らを始祖に持つ御殿家を中心に、向氏が大部分を占めていることから、首里の士族社会に限定していうと、王族の末裔に権力が偏る傾向にあったと思われる。それでも、各階層の首里士族が協力体制を築くことで国家事業を完遂させ、近世琉球の国家公務員が担う役割を果たしていたのではないだろうか。

⁷ 蔡温による治水技術が纏められた書。立津春方編『林政八書』東京図書、1973年に所収。

⁸ 前掲『名護市史 資料編5 文献資料集1 羽地大川修補日記』27頁。

VIII. 参考文献、調査協力

<家譜資料>

『向姓名護正統名護家』沖縄県立図書館所蔵

『向姓家譜大宗勝連家』那覇市歴史博物館所蔵

『孟姓家譜支流長嶺家』那覇市歴史博物館所蔵

那覇市企画部市史編集室編『那覇市史 資料篇 第1巻7 家譜史料(3) 首里系』那覇市役所、1982年

<参考文献>

田名真之『沖縄近世史の諸相』ひるぎ社、1992年

名護市教育委員会文化課市史編さん係編『名護市史 資料編5 文献資料集1 羽地大川修補日記』名護市役所、2003年

「沖縄の土木遺産」編集委員会編『沖縄の土木遺産～先人の知恵と技術に学ぶ～』沖縄建設弘済会、2005年

田里修「蔡温年譜」『沖縄大学法経学部紀要(6)』沖縄大学法経学部、2006年

沖縄しまたて協会編『琉球の築土構木—土木・技術からみた琉球王国—』沖縄しまたて協会、2016年

<調査協力>

経法商学部名誉教授 田里修

IX. 指導教員コメント

本研究は、昨年に引き続き、兼城さん自身のルーツである『向姓家譜正統名護家』の内容分析である。昨年は共同研究として、複数の家譜を照合し、共通項目を見つけて分析するというものであったが、今回はより家譜を深く分析することに重点が置かれた。

昨年から行っていた同家譜の翻刻と日本語訳が完成したことで、向氏名護家の人たち(尚質王にルーツを持つ首里土族)が携わった国家プロジェクトに着目することができた。調べてみると、それらは、琉球の五偉人に数えられる久米村の蔡温が主導した国家プロジェクトである河川工事や乾隆検地など、まさに琉球の歴史を動かした大事業であり、そこになぜか向氏名護家一族の者たちがこぞって参加していたのである。その謎を解明すべく、蔡温関わった琉球の土木建築や治水工事、風水見、測量など、多方面での先行研究を収集した。幸いにも、兼城さんが受講している本学の田里修先生の法史学の講義で、蔡温の大御支配(乾隆検地)や河川工事に関する内容が扱われていたこともあり、田里先生からは貴重な史料なども提供していただいた。記して感謝申し上げたい。

兼城さんは、本研究のテーマを卒業論文として執筆しているところだが、先行研究では使用されていない『向姓家譜正統名護家』の分析を行うことで、従来の研究を補完してい

る。ただし、今回は字数や時間的制約もあり、名護家の人びとが参与したプロジェクトから、国家規模のプロジェクトの全貌を解明するまでには至っていないので、それは卒業論文の中で描いてくれると期待している。